

電車内における乗客の情報行動に関する実態調査 —つくばエクスプレスを対象として—

澤田 侑希

本研究では、近年の情報メディアの多様化が、電車内での行動、とくに情報行動にどのような影響を与えているのかを実証的に明らかにするために、つくばエクスプレスを対象路線として車内における乗客の読書行動、メディア機器利用行動などについての実態調査を行った。つくばエクスプレスの沿線整備の目的からも、つくばエクスプレスは、平日は通勤・通学のための利用者が多いこと、目的地まで乗車している時間が比較的長いことから、先行研究で主に調査対象となっている東京を中心とした路線と比較して、乗車中の行動には、異なった特徴があることが予測された。

電車内での行動内容を観察した既往研究と本研究とを時系列比較すると、この20年間で車内での行動として読書率が相対的に減少しており、代わってヘッドホンステレオや携帯電話の使用の割合が増加しているという結果が得られた。

本調査では、電車の種類、乗車時間、電車の行く先等を類型化し2011年4月10日から9月28日の間に行い、計3,403人の乗客についての行動実態を明らかにした。車内での読書率に関しては、男性は19.0%、女性は乗客の10.6%であった。既往調査との比較では、読書率は低下傾向であるものの、その減少率自体は僅かであった。

次に、メディア機器利用は乗客の39.8%が行っており、なかでもイヤホン着用が全体の15.0%であり、さらに、複数の作業を同時に行う場合の組み合わせでも、イヤホン着用の頻度が最も高かった。また、本研究では、スマートフォンなどのタッチパネル式携帯端末の普及をうけて、電子メディア機器の調査項目に携帯電話操作とは別に、タッチパネル端末の利用を調査したところ、携帯電話使用の比率は、従来調査の結果と大きな変化が見られなかったにもかかわらず、タッチパネル端末操作率は8.5%と、今日のメディア機器利用の動向を反映する結果が明らかになった。

また本研究ではつくばエクスプレスの車内において行われた実態調査について考察したが、車内における行動は乗客の特性に大きく依存するものであり、その特性は様々な要因によって決定される。たとえば今回の調査ではノートPC利用者が一定数いたが、他の路線ではまた異なった傾向が現れることが予測される。そのような車内における行動の実態を把握するためには、本研究と同様の実態調査が必要である。しかし、今までにこのような実態調査に関する検討は少なく、今回の検討は不十分とはいえ貴重な成果であると考えている。

(指導教員 池内 淳)